

## 佐藤太清について

自然から感受したイメージを独自に解釈し、詩情豊かな世界観を創出した日本画家・佐藤太清（1913～2004年）は、2023年に生誕110年、2024年に没後20年を迎えます。

太清の故郷である京都府福知山市に流れる由良川は、豊かな恵みをもたらす一方、深刻な水害を発生させる暴れ川としても知られています。美しい自然が時に様相を変える瞬間を太清も目撃したことでしょう。絵の道を志し18歳で上京した太清は、児玉希望の内弟子として日本画の修行を開始しますが、後に独自の画風を形成した礎に、このような自然との関わりが影響したと考えられています。

太清の作品制作は、花鳥風月を静止した状態で絵画化する従来の日本画概念から脱却したものでありました。1960年代には、波や夕立、台風など自然の持つ強大なエネルギーを動的に表現しつつ、生命の所在を問いかける花や鳥を画面に登場させるなど、その作品群には動と静、生と死など対極のテーマが存在します。53歳で描いた《風騷》（日本芸術院蔵）への評価により、1967年に日本芸術院賞を受賞しました。

1980年より10年にわたって制作した「旅シリーズ」は気韻奏でる風景の中に生命感あふれる動植物を描いた作品群であり、それらは、従来区分されていた花鳥画と風景画を融合させた新分野、花鳥風景画の確立と評価され、1992年に文化勲章を受章します。

最晩年の81歳で描いた大作《雪つばき》（日本芸術院蔵）には、優しい情感をともなった清浄な雪とその雪の重みに耐えるように咲く大輪の椿が描かれ、その心象は今もなお多くの人々に愛されています。

---

そこに花の、鳥の隠れようもない美が現われる。

私にはそう見える。

鑑賞する者が安心して幾度も作品を見ることができる。

本展監修 青木保（文化人類学者・前国立新美術館館長・元文化庁長官）

自然と対峙し、それをずっと見つめることだけを続けてきた太清の目には、ゆるやかにその裾野を広げる可視領域の外側の光が捉えられていたのではないだろうか。彼はその感触を絵として描き出すことに一生を捧げた。太清の絵を眺めていると、私は画家のそんな孤独な旅を感じることが出来る。

福岡伸一（生物学者・青山学院大学教授）

佐藤太清氏の作品を見た時、一瞬息が止まりました。

こんなに心が清い画家が世界に存在していたのかと思いました。

蓑豊（兵庫県立美術館館長）